

# プロテスタントと正教会の違い

プロテスタント教会と正教会の違いについておおまかに説明したい。これは西方教会（ローマン・カトリック教会とプロテスタント教会）の考え方と東方正教会（オーソドックス・正統教会）の神学の違いでもある。この場合、正教会神学とは教父神学であって、古代教会の神学でもある。これは 1000 年間キリスト教世界を支配していた考え方である。これは違うとか、言いすぎだという方もいるかも知れないが、私の経験・理解の範囲内であることを承知して欲しい。故に神学論文ではない。正教の中でも色々な解釈がある。

## 【原罪理解の違い・悪理解の違い】

プロテスタント...人間本性が悪である。人間は犯罪者である。  
正教会...人間本性は悪ではない、習性が悪である。人間は意志の病人である。

### ・《悪とは何か？》

聖ディオニシオス・アレオパギテースは『神名論』（485～531）の中で悪魔について次のように書いています。

・「悪とは不完全な善である。」  
・「悪というものは、悪魔においても我々の魂においても、悪として存在するのではなく、それぞれに固有の善のあるべき完全な状態が欠如、不在であることによるのである。」

悪魔は本性から悪ではありません。神から、存在、知恵、意志、能力、思考を既に与えられているからです。すべての存在物は、善なる神から出、その善である存在自体をいただいているからです。善からは善しか出ません。もし、悪魔が本質から悪なら、自分の存在も否定しなければならないでしょう。世の存在者で、善に全く与らないような者は存在しません。彼は《善》という状態に留まることが出来なくなった者であり、神からせっかくいただいた《善》なる多くの賜物を感謝できなかった者なのです。  
悪魔は、自分の《善なる性質》を《否定》し、悪になりえない善なる性質を《悪》にしつづけるという《強情者》《変わり者》なのです。  
何が不満だったのでしょうか？自分を生んでくれた者に敵対するとは、何と悪魔とは人間に似ているのでしょうか。実は逆で、神から離れた人間が悪魔に似てゆくのです。

『**悪とは存在ではなく、善の欠如した状態である。**』

神の創造された物の中に《**悪**》はありませんでした。神は悪をお造りにはなりませんでした。

ゆえに《**悪**》とは、《**存在**》ではなく《**善が欠如した状態**》なのです。肉体も善いものですが、悪の目的の為に使われると、悪になってしまうのです。しかし、善の方向へ向きを変え、善の為に用いるならば、本来の善の姿を回復するのです。

人間の中にある、すべてのものは『**良いもの**』です。神の恩恵によって、自分の中にすでに神によって与えられている善を开花させるか、悪にだまされて幻影を追い求め、利用されるかだけなのです。

《**罪**》とは『**的をはずす**』という意味があり、神に生きる生き方に背を向けて、神を必要としない生き方を選ぶことであり、生き方全体が罪なのです。つまり、『**その人自身の存在が罪なのではなく、その人の方向性の問題**』なのです。

しかし、プロテスタントは人間の存在そのものを悪としてしまいます。だから生まれながら罪人であり、呪われており、墮落ということを強調します。そうすると、自分の存在自体が悪であるかのような錯覚を起こしてしまうのです。

・《**罪・悪は人間本性の外からやって来た。**》

- ・「僕たちが主人のところに来て言った。だんな様、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか。主人は『敵の仕業だ』と言った。」(マタイ 13:27)
- ・「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」(創世記 1:31)

「善の本性は悪の本性よりも一層強力なものです。善は確かに存在しますが、悪はそれに反して、存在しないか、仮に存在するとしてもそれが為された瞬間にしかすぎません。」(フォーティケーのディアドゴス)

悪は意思によってこの世界に入り込んできました。悪は《**人間本性**》ではなく、《**人間の習性**》です。神は人間を善なるものとして創造されたからです。人間が自然に悪に変化していったとするなら、神の創造は失敗であり、神は悪を創造されたこととなります。悪は人間の外からやって来たのであって、人間の内から生まれたものではありません。

悪はそれ自体としては存在しないものです。悪が現実のものとなるためには、人間の意志が悪を選んでくれなければ存在できません。この意志こそ、悪の唯一の棲家であり、悪に対して一定の存在を与えます。人間は本来、神を知り、神を愛するようになっていたのですから、人間が自分の意思によって実在しない善・幻影に向かって行ったとするなら、外部からの影響によってでしか説明できません。この外部からの影響というのは、人間の意志とは《別の意志による説得》であって、人間はこの意志に服従してしまったのです。この外から来た意志を持つ、霊的な存在を悪魔といいます。

罪とは《意志の病である》と教父たちは言っている。意志はこの病によって善の幻影を善と取り違えて誤るのです。悪魔は、人間の意志を狂わせ、この世・偶像・幻影を選ばせるのです。

アダムは罪の言い訳をして『すべての責任は他人と、神にある』といました。彼は自分の意思から悪が生まれたことを認めませんでした。強情になり、神の恵みが入らないように、自分の内に壁を造ってしまったのです。罪は、人間の自由意思によって現われる。

#### ・《原罪とは何か？》

原罪とはアダムが自由意志をもって神の戒めを犯し、神の法に背き、人間の目的と本分に違反したことをいいます。教父たちは、原罪とは人間を神から離れさせた《自由意志の決定》であると言っています。原罪は、生物学的な遺伝はないといわれています。なぜなら個人の自由意志は遺伝しないからです。アダムの罪の結果この世は、悪魔と死と呪いの支配下になっています。そこに生まれてくる全ての人間は、罪を教育され、自分の自由意思をもってアダムとは違う違反を神に対して犯すという《人間の避けられない状態を原罪》といっています。

「私たちの罪が先祖の原罪なるものに起因するとすれば、私たちの罪は親からの遺伝で受け継いだ病気のようなものとなり、私たちが自分の遺伝病に対して責任を持ち得ないし、また持つ理由もなく、私たちはむしろ被害者の立場に立つように、罪についても私たちはそのために責められるいわれがないことになります。」

(吉村善夫『原罪について』)

「アダムの原罪なるものも、私たちの罪の歴史的起源を物語るのではなく、私たちの存在の根源にある罪を指すものと解釈されます。いわゆる宿罪なるものも、先祖から遺伝した罪のことではなく、私たちの個々の罪行、すなわち私たちの存在の根源にある罪から必然的に生

じるのだということの意味する言葉だと解釈されます。」

(吉村善夫『原罪について』, 日本の神学 14)

■「『原罪』とは、決して歴史の起源においてなされた個人的で原初的な自由行為が、その倫理的な質を後世に伝えるということを用いるのではない。いわゆるアダムという個人、もしくは人間集団がなした行為が、我々にもその結果を及ぼし、いわば生物学的に我々に継承されるという、そのような思想は、原罪に関するキリスト教の教義と全く関係がない。...原初的な自由行為における個人的罪過は決して他人に転嫁されるものではない。...それは一個人の主体の自由が、自由として他人に転嫁されないのと同様である。」

(カール・ラーナー『キリスト教とは何か』P.147、148)

- ・「罪を犯した本人が死ぬのであって、子は父の罪を負わず、父もまた子の罪を負うことは無い。正しい人の正しさはその人だけのものであり、悪人の悪もその人だけのものである。」(エゼキエル 18:20)
- ・「『先祖が酔いぶどうを食べれば子孫の歯が浮く』...お前たちはイスラエルにおいて、このことわざを二度と口にすることは無い。」(エゼキエル 18:2~3)
- ・「この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか。それとも両親ですか。イエスはお答えになった。『本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現われるためである。』」(ヨハネ 9:2~3)

プロテスタント教会は、罪を生物学的遺伝であると考えている傾向が強い。罪がどうしてもやめられない理由を生物学的遺伝として考え肉体に問題があると思ってしまう。その結果、生まれながらにして人間は罪をもって生まれており、自分自身の存在や肉体を悪と考える傾向にある。しかし、正教会は人間の存在や肉体を善と考える。罪も遺伝ではなく、個人の自由意志であると考えている。プロテスタント教会は《性悪説》だが、正教会は《性善説》である。悪いのは、人間の肉体ではなく、血液でもなく、存在でもなく、方向性なのである。プロテスタント教会のように《性悪説》を取ると、カルト宗教がそれを利用して悪魔的教理を作ってしまう。統一協会は、悪魔の血を引いているので、神の血に血統転換しなければならないという。先祖からの罪や呪いが因縁として自分の上に覆い被さってくると思っている日本のような仏教、神道の世界だと、《性悪説》がぴったり入ってしまうのだ。

## ・《罪は人間本性に無秩序を与える》

罪は人間を《無秩序》《不調和》にします。罪によって人間は、自分の能力をコントロールする力を失ってしまいました。見ないでよい物を見てしま、愛してはならない者を愛してしまうのです。感情、創造力、知性、意志、感覚、情欲が獣のように勝手に動いてしまい、自分でもどうすることもできません。キリストは、こんな人間を《再統合》するために来ました。人間に《調和》《ハーモニー》《平和》《秩序》を与えます。貪欲から、偶像礼拝からの自由を与えます。神は完全な《調和》《秩序》であって《美》しい。調和のあるものは美しいからです。私たちの意志を神に向けるならば、調和が生まれて来ます。人間だけが《美しい》と感じることができる動物です。人間の罪によって、人間自身の秩序が乱れ、自然界の秩序も乱れました。自分を回復することは、世界、自然界を回復することなのです。

「被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。」

(ローマ 8 : 19)

### 【人間理解の違い】

## ・《人間は神の像と似姿であること。》

聖書を通して私たちに啓示された「人間」とは、

・「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。」(創世記 1 : 26)

(Iコ-7)

・「御子は、見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれた方です。」 (Iコ-7) (コロサイ 1 : 15)

キリストこそ神の完全な《像》であり、そのキリストに《似せて》人間は創造されました。そのキリストから離れたので、《神の似姿》は失われてしまい、《悪魔の似姿》になってしまいました。しかし《神の像》は失われてはいません。《神の像》とは、人間の構造論的なもので、どんなに罪が人を麻痺させても失われないものなのです。しかし《似姿》は恵みであって、失われたり、成長したりします。

洗礼の時、失った《神の似姿》を《胚》の形で聖霊によって受けます。成長するにつれて輝きは増し、背丈も伸び、活気に満ちてきます。しかし、絶えず神に向かって進まず、故意に神に背を向けて神の命 (=キリスト = 生命の木) から離れて死に向かって行くなれば、《神の似姿》の輝きは失われ、靈的に鈍くなって干からび、消滅してしまいます。

この死は靈的な死を意味しています。しかし、それでも《**神の像**》は失われていません。それは《**資本金**》のようなものであって《**神の似姿**》を成長させてゆく為に、神によって備えられた賜物・恵みだからです。人間が悔い改めて、再び神に向かって生き始めるならば、聖靈の助けによってそれを成長させることができるのです。

《**神の像とは**》-自由意志・知性・良心・理性・自己応答能力・精神性。心と身体全体 = 人間。神と交わる力・支配能力。

「人間という名は心と身体に別々にあてはめられているのではなく、その両者に共に語られるのです。この二つは共に神の像に似せて造られたからです。」(グレゴリオス・パラマス - 14世紀 - )

「神の言は新しく創造された地の一片をとって自分の不死の手により私たちの形象を形造り、それに生命を与えました。彼が吹き込んだ靈は見えざる神性の噴出でした。こうして塵と息吹とから不死なる者の似姿としての人間が創られたのです。...このように、私は一方で大地の性質をもつ者としてこの地上の生につながっていますが、また他方で神のかたわれとして永世の希望を胸に抱いているのです。」

(ナジアンゾスのグレゴリオス)

「こころは神の息吹であり、天上的なものでありながらも地と混合されたままにされています。それは洞窟に閉じ込められた光です。しかしそれは消えることのない神的な光なのです。」( " - 4世紀 - )

「土から取られた者は、この『息』を受け取らなかったのであれば、至と高き方の像とみなされることはありえなかったであろう。」

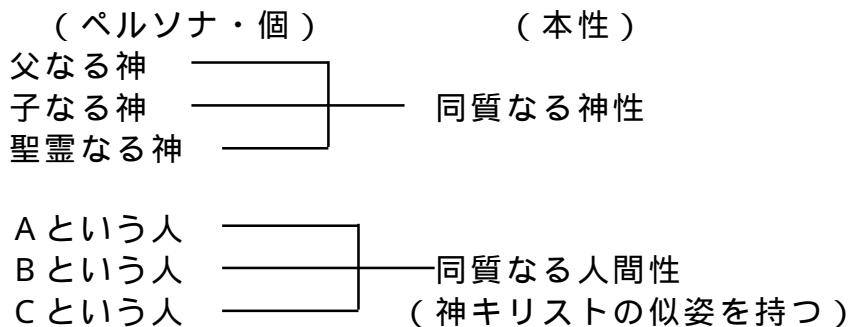
(アレキサンドリアのキュリロス)

人間は神との一致に達するために、その息吹と共に、『**神性の断片**』すなわち恩恵をその創造の初めからその心に吹き込まれていました。  
神が人間を造られた時、体と魂だけで造ったのではなく、人間をこの神の生命、つまり神の靈へと向かわせました。  
聖靈が住まわれない人間は、出来損ないというのではなく、まだその人が完全な人間本性に従って生きていないということ、人間本性が完全に開花していないということなのです。  
魂は神と一体になり生かされ、心は魂によって養われて満足し、満足した心によって身体は生かされるはずでした。  
しかし神から離れた魂は、身体を道具として、この世の物を貪欲に追い求め、心の平安を得ようとしたのです。  
その結果、『**肉体**』は疲れ果てて浪費されてしまい、絶えず物が無ければ満足しないような、物質の奴

隷（偶像崇拜）となってしまう、それでも完全な平安も満足も得られない状態にいます。なぜならこの世の物は一時的な物であり、永遠ではなく、移り変わる性質をもち、消え去って行くからです。永遠な平安は、永遠者である方からしか来ません。完全な愛は完全者である方からしか来ないからです。こういうわけで、神と一体にならない限り、人間には完全な平安も安息も静けさも満足も来ないといったのです。

・《三位一体と人間の本性とペルソナの関係》

人間が三位一体の神の像であるということは、三位一体の神的生命の秩序を人間性のうちに再現することとなるのです。



「キリスト教とは神の本性のまねびにほかならない」  
(ニュッサのグレゴリオス)

人間が神から離れた時、神の似姿が失われ、人間本性はコントロールが失われ、無秩序状態になり、自分のためだけに生きようになった個人は、自分中心になってバラバラになりました。故に、人間性を回復するには、キリストと一体になって失われた似姿を回復し、キリストと同質の人間本性を得て各個人は聖霊によって賜物が生かされ、互いに愛によって一つになる道が備えられたのです。

・《男女の性について》

・「復活の時にはめとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ」  
(マタイ 22 : 30)

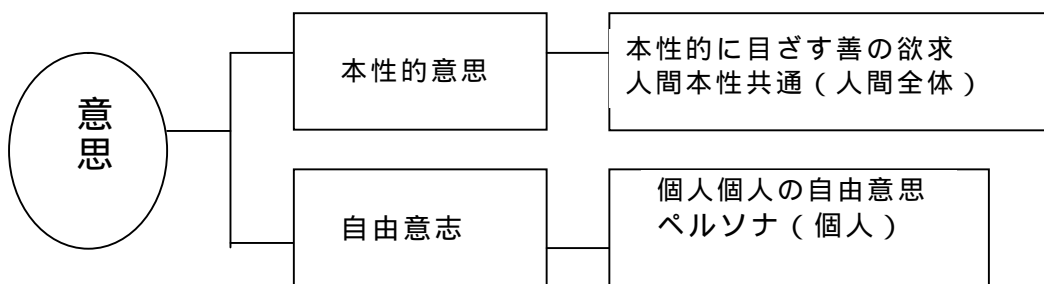
男女という性は、神の像と何の関係もなく、人間の墮落を予知された神によって用意されたものです。神様には、男の神様、女の神様というものはないからです。もしあったとするなら、男は女ではないこと

の故に不完全であり女は男ではないことの故に不完全となり、神ではなくなってしまう。神は常に完全だからです。

結婚とは、男女が一体となる儀式です。神は、男女を、あえて不足する者、限界ある弱い者として創造なさいました。それによって男女が互いに求め合い引き合い一つになるためです。人間が罪によって自己中心になり、分裂し一致できなくなることをあらかじめ見越した神は、一致の手段として男女を創造されたのです。従って、復活の時、人はめとることも嫁ぐこともなく天使のようになります（マタイ 22:30）。事実、幼児にはほとんど性の区別がなく、老人になると性の区別がなくなってきました。性はこの世での《働き》のために与えられているものなのです。

### ・《人間には二つの自由意志があること》

神は一つ的人格的存在（ペルソナ・個）としての人間に語りかけ、人間は神に応答します。人間は神と一体になるように招かれますが、この招きは強制ではありません。それは人間の自由意志に対して呼びかけられるもので、人間は神の意志を受け容れることも、斥けることもできます。人間は善を選択しようが、悪を選択しようが、神の似姿を実現しようが、神と似ても似つかぬ姿になろうが、なお自由を持っています。神の像に創造されているからです。



全ての人間本性は、善を要求しますが、ペルソナ（個人）が善の要求を受け入れたり、拒絶したりします。我々の自由意志は、罪の毒によって麻痺し、歪められ、墮落した自由意志となってしまいました。罪のために暗雲に覆われたように鈍くなり、真の善を知ることもなくしばしば「本性に反する」ことを選び、望んでしまいます。迷うことがすでに病に侵されているしるしなのです。

人間は完全なものとして創造されましたが、それは最初から、目的を遂げていたとか、神と一体であったということではありません。人



間が神の恵みを自分の内に取り入れ、浸透させて成長する力、神と交流する力が与えられていたということです。種は、これから出て成長するであろう芽、茎、葉のひな型である胚をそのうちに完全な形もっています。これと同じです。故に、人間がますます神と交わることができるようになり、神のことが分かり、神からの恵みを自分のものとしていけるようになった時、その人は本来の人間本性の状態に帰って来ているのだという徴になります。

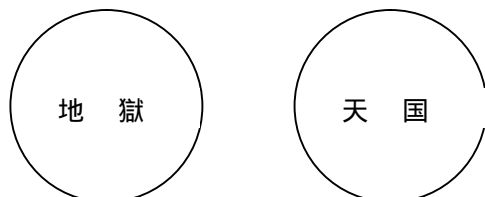
プロテスタント教会は、人間の罪を強調するあまり、人間は罪を犯し墮落したので完全に、恵みを失い、神の像を失い、善を求める意思もなくなったという考えが強い。しかし、正教は《似姿》は失われたが《神の像・断片》は失われていないし、善を求める本性的意思も失われていないとする。もし失われたのなら、罪の呵責や矛盾というものは起こらないであろう。二つの意思がぶつかりあうので矛盾を感じるのだ。正教は人間を信者だろうと未信者だろうと、健常者だろうと障害者だろうと《神の像》として尊重し、尊敬する。

また、プロテスタント教会は男女の性というものが来世まで続くと誤解しており、性同一性障害者を罪人扱いする。しかし正教会は、性は救いのための一手段にしかすぎないと考えているのではないか。

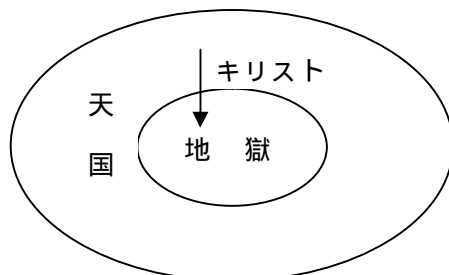
【天国理解の違い】

新教	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天国と地獄を右と左（又は上と下）に分けて考える。</li> <li>・天国も地獄も来世にあると思っている傾向が強い。</li> </ul>
正教	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天国と地獄を右と左（又は上と下）に分けて考えることもするが、地獄の回りに天国が覆っていると考えている。</li> <li>・天国も地獄もこの世から始まっており、来世で完成する。</li> </ul>

《プロテスタント》



《正教会》



神は、世の初めには天国しか作らなかった。神は、地獄をお造りには

ならなかった。地獄は人間が造ったのである。死の世界、闇の世界、恵みのない世界、神のいない世界を地獄という。神は死をもお造りにはならなかった。それは、人間が命の源である神から離れたので、出来上がった状態なのである。つまり、地獄とは神から離れた世界の状態なのである。神は、人間が自らの意志をもって神から離れ、死の世界・地獄を造ることを予め知っておられた。それなのに人間を創造されたのは、地獄の回りにすでに初めから神の愛の世界、天国が覆っているのである。(卵の白身のように)アダムが神から離れ、自ら閉じこもることによって、彼は自分の内に地獄を作り、地獄の中にとどまっているのである。この罪・死・闇・悪魔(嘘・虚像)の世界にキリストはやってきたのである。それは、地獄を天国に、闇を光に、死を命のあふれる国に変えるためである。そしてキリストは教会の姿で世の終わりまで共におられるのだから、《この世が天国》なのである。正教では、天国と地獄を分けて考えないのである。

- ・「神の国は、見える形では来ない。ここにある。あそこにあるというものではない。実に神の国はあなたがたの間にあるのである。」(ルカ 17:20)

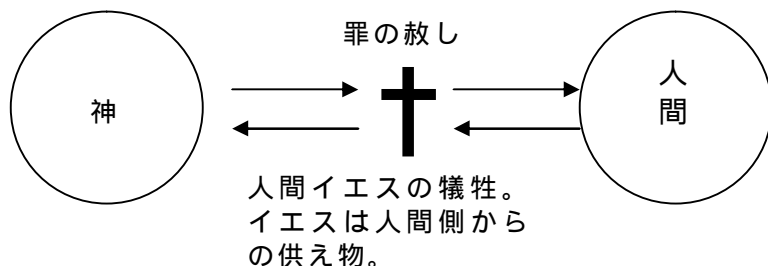
### 【贖罪理解の違い】

新教	<ul style="list-style-type: none"> <li>・神と人間との対立構造。人間は自分の罪という借金をキリストという犠牲によって支払った。悪いのは人間である。</li> <li>・キリストはあくまでも、人間側からの供え物。犠牲である。</li> <li>・罪が赦されるかどうか为中心課題である。法律的である。</li> <li>・信じれば赦される。</li> </ul>
正教	<ul style="list-style-type: none"> <li>・神と悪魔との対立構造。人間は悪魔に騙されたのであって、人間は悪魔の支配下に入っている。神は悪魔を滅ぼして人間を解放した。</li> <li>・キリストはあくまでも神として悪魔と戦う。贖罪の業は三位一体の神の業である。</li> <li>・罪と死と悪の滅びが中心課題である。</li> <li>・キリストと一体になることによって命・赦し・天国をいただく。</li> </ul>

### 《プロテスタント》

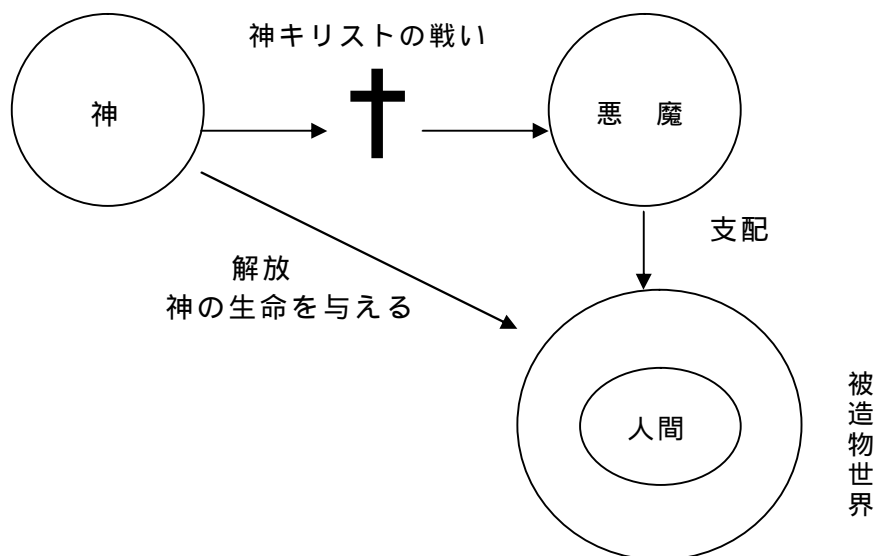
プロテスタント教会の贖罪論では悪魔が登場しない。神と人間との対立構造が中心である。勢い、悪いのは人間であって、人間は自分の違反という責任を迫られ、罪が赦されるかどうかはいつも論点となる。キリストはあくまでも、人間側からの供え物。犠牲であり神として捕らえられていない。贖罪は三位一体の神の業ではなくなっている。罪

は借金のようなものであり、キリストが自らの命を献げて供え物・身代金となり、人の罪の借金を支払った。そこで人は神に罪が赦されるというのである。これをアンセルムスの《満足説・客観説》という。これはラテン型贖罪論であり、プロテスタントはほとんどこれである。



### 《正教会》

正教会では、悪魔が登場する。一番悪いのは悪魔であって、彼は不法にも神のものである人間に手を出し、人間を奪ったのである。故に人間は悪魔に騙されたのであって、むしろ被害者である。対立構造は三位一体の神と悪魔との戦いとなる。神父は、神子をこの世に遣わし、悪魔と対決をさせる。悪魔はキリストを殺すが、彼は三日目に復活して、死を滅ぼし、地獄に降り、死者を解放し、地獄を滅ぼし、光の国としてしまった。キリストはこの世を悪魔の支配下から奪い、ご自分の支配下に置かれた。悪魔・罪・死の支配下にあった人間は、キリストの分捕り品となり、キリストは人に赦しと永遠の命を与える。これが《勝利者キリスト》という贖罪論であり、キリスト教会を1000年間支配していた贖罪論である。



## 《救いとは何か。》

### 《正教会》

正教会は、救いとは完全に《キリストと一体になること》である。なぜならば、滅びとは《神からの分離》であり、救いとは《神と一体になること》だからである。命の源泉である神から離れることが、死なのである。キリストがこの世と人を救うために取られた手段は、この世と人を受け取られて《ご自分の中で一体化する》ことによってその《性質を変えられる》という方法だった。正教会はすべてにわたってこの考え方を適応している。

神と人が一体になる。...受肉によって人間性に神性を与え、人間と神の間にあったあらゆる障害をご自分の内で、一つにされる。

キリストが洗礼を受ける。...水を聖別し、水の中で葬りと誕生を与える洗礼を制定される。

キリストが十字架にかかり苦しみを受ける。...苦しみに意味を与える。

この世のカルト宗教、民間信心、イデオロギーは苦しみからの解放を約束するが、キリスト教はそうではない。主は、この世から苦しみが無くなるために来たのではない。苦しみは墮落したこの世では取り除くことはできない。しかし、主は苦しみを担われることによってその意味を《変容》したのである。群衆はキリストが奇跡と癒しを与え、苦しみを取り除くことを求めた。しかし、主が《苦しみと死を通過して復活に至った》ならば、私たちも主が通った同じ細い道を通らなければ復活にいたることは出来ない。主が苦しまないで復活したなら、私たちも苦しまないで復活するだろう。しかし、メシアが通った道を通る以外、救いはないのである。しかし、苦しみはキリストと一体になって共に歩むのである。

キリストが自分を献げる。...自分の体と共に、全被造物を父なる神に献げることをもって、全被造物を清められる。

キリストが死を受け取られる。...死を復活への入門とする。

キリストと一体となる洗礼や聖体の祭儀（聖餐）という sacrament により、またキリストの体である教会から離れないことにより、聖書（神の言葉）から離れないことにより人に命と救いと神化が与えら

れる。正教会には《義認》や《聖化》といった区別はないし、そういった救いを分離、分割したり、段階、評価をつけたりしないのである。

「こうなれば義と認められ、こうなれば聖められた、異言が語れたら、奇跡が行えたら、これが出来れば救われている」というものはないのであり、また作ってもいけないのである。

洗礼は、《義》と《聖》の始まりであり、聖体の祭儀により、絶えず《義》と《聖》が与えられる。キリストから離れれば、再び《義》も《聖》も失うだけなのである。なぜなら《義》も《聖》もすべて神だけのものであって人間の内には《義》も《聖》もない。人は《神の義》と《神の聖性》をいただくのである。聖霊の働きによってキリストとの一致が深くなればなるほど《義》も《聖》も深くなるだけなのである。救いというのは《存在》なのではなくて《状態》なのである。

「人間は神から本性、罪、死という三重の障害によって離れ去ったのです。しかし主キリストによってこれらの障害は次々と除去されました。この除去のおかげで人間は神を十全に所有し、直接神と一致することができるようになったのです。なぜなら主は受肉によって人間性の障害を、その死によって罪の障害を、復活によって死の障害をそれぞれ除去したからです。」(14世紀ニコラス・カバシラス)

「実に、キリストに受け取られなかったものは癒されない。しかし、神と一つに結ばれたものは救われる。アダムの半分だけが罪を犯したのであれば、その半分がキリストに受け取られ、救われたであろう。しかし、全体として罪を犯したのであれば、全体が生まれた方全体に一つに結ばれ、全体的に救われることになる。」

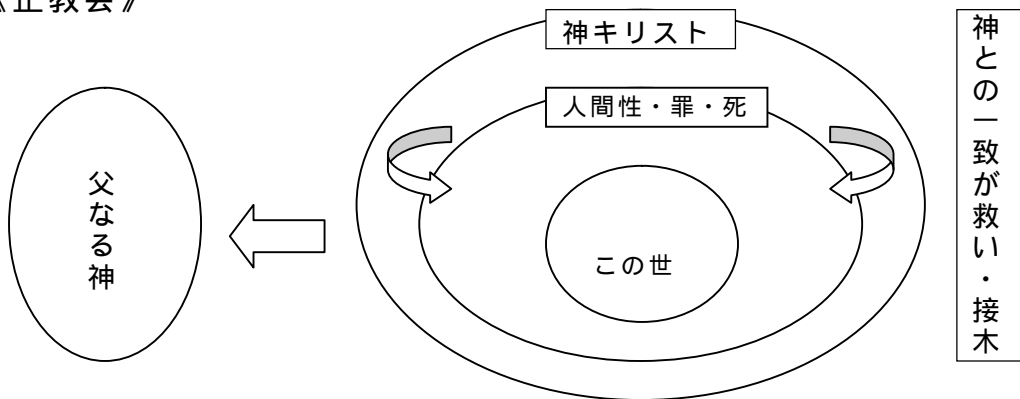
(ナジアンゾスのグレゴリオス『クレドニオスへの第一の手紙』より)

「何のために彼は降って来られたのか。…彼は罪を滅ぼし、死を征服し、人間に生命を与えるために。」(エイレナイオス)

「神の御子は、人間を永遠の死から救うために人間になられたのである。…彼は今までと同じもの(神性)としてとどまりつつ、しかも同時に、今までなかったもの(人間性)をまとい、神である御父と等しい姿に僕の姿を合わせられた。彼はこの二つの本性を一致させるにあたって、光栄がより低いもの(人間性)を消し尽くさず、また受肉がより高いもの(神性)を低めないようにされた。従って神性と人間性の実体はそのまま完全に残り、一つのペルソナの内に体合するので

ある。尊厳が卑しさをとり、力が弱さを、永遠性が可死性をとるのである。われわれ人類の負債を支払うために、犯しえない神性が、苦しむ人間性と一致したのである。つまり、真の神、真の人は唯一の主において合致したのである。こうしてはじめてわれわれの救済に相応しいことが行われるようになった。すなわち、神と人との唯一無二の仲介者が、人間であるからこそ死ぬことができ、神であるからこそ復活することができるようになったのである。…もし彼が真の神でなかったならば、彼は我々に救いをもたらすことはできなかったであろう。もし彼が人でなかったならば、われわれの模範となることはできなかったであろう。」(ローマの聖大レオ)

### 《正教会》



人間救済の業は、父と御子キリストと聖霊 = 神ご自身によって遂行される。キリストは、悪魔・罪・死の支配を終わらせ、人間をそれらの統治から解放することによって、神の国を完成させる《創造の再統合》 = 創造の回復と完成を目的としたものである。正教は、罪と死と悪魔を分離して考えない。罪のあるところに同時に死があり、死のあるところに罪もある。

### 《プロテスタント》

プロテスタントは、救いとは《キリストを信じること》である。これは《神の業よりも、人間の信仰心という業》に重点を置く。だから「信じれば救われ、信じなければ救われない」となる。こうなってくると信じられない者たちを滅びると決めつけることになり、責め、裁くようになる。自分自身も信じられない自分を自分が責めてしまうことになる。信仰というものが非常に《人間の感情》に左右されることとなる。

### 【三位一体理解の違い】

新教	<ul style="list-style-type: none"> <li>・三位一体を正しく礼拝できない。プロテスタントの中には、知らないで異端の信仰をしている者もいる。バランスが失われている。</li> <li>・ユダヤ教的であり、父のみを強調する。「父なる神」と祈る傾向が強い。《三一神信仰》ではなく《唯一神信仰》である。</li> <li>・キリストの神性より人間性を強調する。バランスが失われている。</li> <li>・聖霊に関しても単なる上からの力であると思っている。</li> <li>・父と子と聖霊の働きがバラバラである。</li> </ul>
正教	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オーソドックスとはオルソス（正しく）とドクサ（栄光・讃美）からなっている。三位一体を正しく讃美する教会という意味である。</li> <li>・父と子と聖霊を決して分離しない。三位一体がしっかりしている。</li> <li>・キリストの神性と人間性のバランスが取れている。</li> </ul>

「この方は、かつては人間でなく、神であり御子、代々に先立って存在された方のみであられ、肉体及び肉体的なものと混在することはなかったが、終わりの時に、人間ともなられ、私どもの救いのために人間を受け取られ、肉体によって苦しむ者、神性によっては苦しめない者、肉体によって限定された者、霊によっては限定されざる者、同時に地上の者かつまた天上の者、見える者であり精神によってのみ捉えうる者、把握しうる者であり把握しえぬ者となられた。それは、同時に完全な人間であり神であるこの方によって、罪のために墮落した人間が再創造されるためである。」

ナジアンゾスのグレゴリオス『クレドニオスへの第一の手紙』より

「彼は鉄（人間性）として切り、火（神性）として焼く。...キリストは人間性によってラザロを甦らせたのではありません。また神性によってその墓の前で涙を流したのでもありません。」

（ダマスコの聖ヨハネ）

【権威をどこに置いているか】

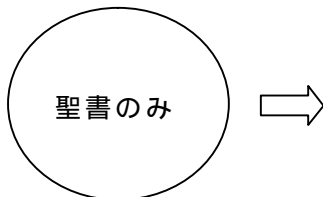
新教	・権威は聖書にのみあり、従って聖書を上手く語れる牧師、魅力のある牧師、指導力のある牧師に権威が集中する。
正教	・権威は教会にあり、聖礼典（ sacrament ）にあり、聖書にあり、聖伝承（教会会議規則）にある。

【プロテスタントの信仰三原則の間違い】

新教	・信仰のみ。 ・聖書のみ。 ・恵みのみ。
正教	・信仰と行いのバランス。 ・聖書と教会（聖伝承）のバランス。 ・恵みと自由意志のバランス。

《プロテスタント》

結局カトリック教会への反動から出たものは、反動にすぎないのでバランスが失われている。それでいて、カトリックを認めたらプロテスタントではなくなるので、自分を保持するためにも、自分たちの教理が正しいことを極端に強調する。それがバランスの悪さになっている。偏った信仰である。食べ物でも偏食をしたら病気になる。信仰も同じなのである。



- ・ 聖書のみにしてしまったので人の頭の数ほどある聖書解釈が生まれ、教派が数え切れないほど生まれた。そこから異端も再び生まれ、教父時代の無秩序に帰ってしまっている。
- ・ 聖書を聖典化したのは教会であり（福音書だけでも10位あった）、様々な解釈を、教会会議を開いて信条という形でまとめたのも教会なのである。教会に権威があることを忘れてしまい、個人の信仰が強調され、教会に従わないわがままな信者が生まれた。
- ・ 聖書は教会から離れて読むではなく、教会は聖書によって自らを規制するのである。このバランスが大事である。





恵みのみ



- ・ 神の恵みだけで人は救われるとするならば、救いというものは最初から決まっていることになってしまう。人間の側の応答（意志）があって初めて救いは完成する。
- ・ 間違った予定論が生まれてしまった。救いと選びとは違うのである。選ばれるのは神の務めをするためである。神は全てを予知しておられるが故に、予定される。

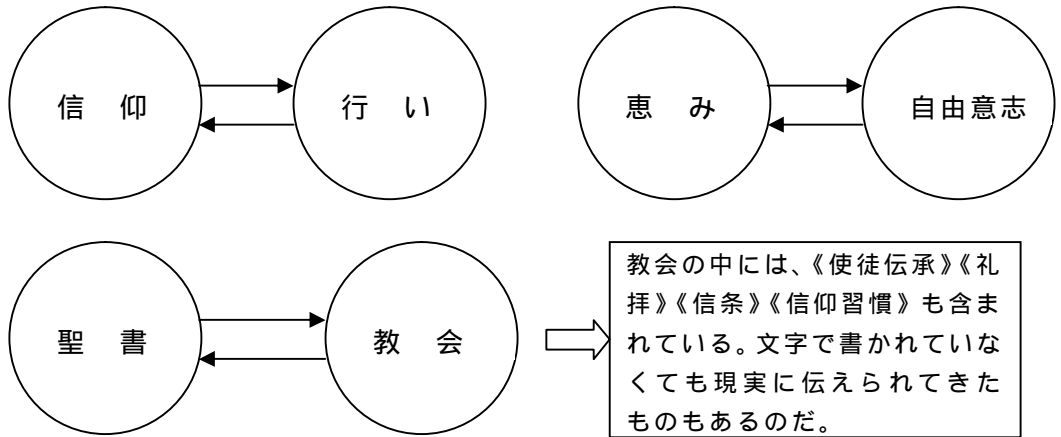


信仰のみ



- ・ 信仰のみにしてしまうと、肉体というものが軽視されてしまった。信仰を心の問題、精神論にすり替えられてしまい、礼拝が講演会・勉強会のようなスタイルになり、体を参加させる動作がなくなった。礼拝堂も講演会場ようになった。知的なこと、精神論的なことが良いことであって、肉体を修道するということがなくなってしまった。
- ・ 信仰を知的なことだとするならば知的障害者、認知症の方は救われないことになってしまう。また幼児には理解する力がないものとして幼児洗礼を授けなくなった。
- ・ 修道というとすぐに《行い》というアレルギーがある。一種のマインドコントロールであり《霊肉二元論》になってしまっている。
- ・ また、復活も霊的に復活することとっており、仏教の靈魂不滅論と重なって理解している。肉の復活ということを軽視している。
- ・ しかし、信仰のみと言っていながら、実際はそうではなく、非常に熱心な頑張り信仰が生まれた。それは信仰 = 自分の感情になっており、自分の感情ほど不安定なものはなく、どうしても不安になるので、結果を出すこと、業績に頼ろうとするのである。

《正教会》すべてはバランスである。



【教会観の違い】...作成中

新教	・
正教	・